都築久義先生を送る

寺尾　剛

本学国文学科教授（大学院文学研究科国文学コース兼担）都築久義先生が、定年により本年三月をもって御退職されることになった。

先生は昭和四十九年四月、愛知淑徳短期大学専任講師として着任され、翌昭和五十年四月に愛知淑徳大学創設メンバーの一人として文学部国文学科助教授に就任、ついで昭和五十七年四月に教授に昇格、さらに平成元年四月、大学院文学研究科開設に伴い、その修士課程教授、平成三年四月には博士課程教授を兼担されて現在に至っている。数えてみれば、三十六年もの長きにわたり、この愛知淑徳学園に奉職なされてきたのである。まさに先生のこれまでの「半生」の年数を超える歳月ということになる。しかもその間、ひたすら近現代文学の専門家として国文学科の専門教育科目の担当を務め続けられてきたばかりでなく、昭和五十八年四月から平成元年三月までは国文学科主任、平成元年四月から平成七年三月までは学生部長、また、平成七年四月から現在に至るまでの十六年もの長きにわたって副学長といった、数々の重責を果たされてきた。またその副学長在任中には、企画・広報・入試室長（平成七年四月から平成九年三月まで）、エクステンションセンター長（平成九年四月から平成十二年三月まで）、教養教育センター長（平成十二年四月から現在に至る）、外国語教育センター長（平成十五年四月から現在に至る）等を兼任されてきた。さらには、平成十五年六月から現在に至るまで

のほぼ八年間は、愛知淑徳学園常任理事として学園全体の経営にも深く関与されてきた。

先生が副学長の職にあった十六年間のうちに、本学は文学部のみの単科大学から、複数学部を有する総合大学へと大きな発展・充実を遂げ、また女子大学から共学大学への大変革を実現した。現在の八学部・八研究科体制の構築に至るあらゆる過程・局面において、常に尽力してこられた先生の、これまでの御功績とその強靱な精神力を振り返る時、目頭が熱くなるのを禁じ得ない。先生在っての、愛知淑徳学園であり、愛知淑徳大学であり、そして我が文学部国文学科であったのだと心から思う。

むろん、先生の御功績は学校業務に止まるわけではない。御研究の方面においても、日本近現代文学、とりわけ尾崎士郎・戦時下の日本文学・郷土文学等の分野に関して、斯界の第一人者としての地位を築かれていることもまた、周知の事実である。たとえば、どの文学事典、文学研究書でもよい。その中の尾崎士郎、あるいは戦時下の文学という項目を紐解けば、必ずや先生の御名前を目にすることができるであろう。この分野の研究史において先生の御功績は不朽の価値を有し続けているのである。しかも先生は、いかなる激務の中にあっても研究を途絶えさせることなく、常に現役の研究者であり続けている。本校の機関誌に対しても、毎年欠かすことなく最低でも一本は玉稿をお寄せ下さっている。さらには昭和五十七年六月より昭和六十三年までは、昭和文学会の評議委員という重責も務められ、学界の育成に貢献されてきたことも、ここに付記しておきたい。

また地域貢献という側面においても、東海地方の郷土文学について、中日新聞はじめ多くのメディアを通じて紹介なされてきただけでなく、尾崎士郎の出身地である愛知県吉良町の行っている尾崎士郎作文賞の審査委員長も長年にわたって務められてきた。先生の郷土への深い御愛情は、この愛知県あるいは東海地区全体の方々の間に確実に浸透しているはずである。

そして、やはり最も強調しておきたいのは教育者としての先生の御姿である。このことは、私からではなく、むしろ直

接学生達に語ってもらいたい気もするのであるが、敢えて代弁させて頂くならば、彼らはみな、先生のことを良き「親父」と思って慕っていたのではないかと思う。先生は、学生と接する時、常にやさしく、かつ、どっしりとした態度で応対する。それだけで学生は、父親が側にいてくれているような安心感を懐くのである。学業遅滞のおそれのある学生なら、なおさらである。くよくよするなと、いつもの気さくで大らかな笑いで激励し、別れ際に、必ずポンと肩を叩いてやる。それに励まされ救われた学生がどれほど多かったことか。私にとって印象的であった先生の御姿と言えば、毎年の卒業論文の提出日に、携帯電話を片手に受付窓口の側にずっと座っておられた時のものである。その御姿を拝見するたびに、私自身、教師の鏡とはまさにこのことであるかと、思わず背筋を伸ばしてしまったものである。学生達にとってもそれは同じであろう。彼らにとって、先生はまさに尊敬すべき一教師であると同時に、頼りになる、かけがいのない一人の「親父」であったにちがいない。それが証拠に、先生に御世話になった卒業生が、卒業後もしばしば先生に面会を求めに来る。ある時、たまたま取り次いだ私が何の用かと尋ねると、人生相談、と答えたので思わず笑ってしまったが、同時にそこまで学生に慕われている先生のことを非常に羨ましく感じたものである。

これまでどれだけ多くの学生が、先生の暖かい激励を背に旅立っていったことであろう。三十六年（先生ご自身の御言葉を借りれば「半生以上」）もの長きにわたり学生達を見守り続けた先生の御恩に対し、彼らに代わって、ここに御礼の言葉を捧げたい。

先生は、御退職後も、愛着のある「郷土文学」の講義は継続して持たれるとのことである。このことは学生達にとっても、また我々国文学科教員にとっても幸福なことである。まだまだ先生の叱咤激励を私達は必要としているのである。

先生、国文学科への長年にわたる御愛顧、本当にありがとうございました。今後は御研究の方を一層深めるとのことですが、くれぐれも御体を御大事に。そして今後とも変わる事なき御教示御鞭撻のほど、何とぞよろしく御願い致します。

（文学部国文学科主任）